

Human

## さとうきび育種にかける思い

種子島研究調整監

田村 泰章 (たむら やすあき)

### これまでの仕事

平成4年に入省以来、水稲育種に携わってきました。平成18年に九州沖縄農業研究センター筑後研究拠点稲育種グループに配属となり、「ミズホチカラ」「モグモグあおば」などの水稲品種の育成に関わることができました。「ミズホチカラ」はそれまでになかった米粉パン適性を有していることが明らかになり、現在でも多くの人に栽培されています。この品種は20年以上の年月と、多くの方々の力が結集して育成されたものです。平成28年に国際農林水産業研究センター熱帯・島嶼研究拠点に異動となり、水稲世代促進事業を担当しました。亜熱帯気候のもと1年に2回栽培できる地の利を生かし、形質固定の短縮を進めました。平成31年より現職を勤めています。

### さとうきび研究の魅力と奮闘

さとうきびは水稲と同じイネ科の作物で、各節に葉身、葉鞘、根が形成される形態は似ていますが、大きさは桁違いです。太く、見上げるほど高く伸びた茎。風が吹くとあの歌を思い出させるザワワという音。圃場から見える青い海。水稲との違いに戸惑いを感じながら、さとうきび研究が始まりました。草丈が2メートルを超え風が通らない真夏の圃場。台風後に乱倒伏し、入ることさえためらう圃場での調査。さとうきびを刈り取り圃場から持ち出すときの重さ。さとうきびならではの大変さを実感しながら種子島研究拠点22名の方々と一緒に新たな品種を世に出すために日々奮闘しています。



▲種子島研究拠点職員(前列右から二人目が筆者)

### これからの抱負

さとうきびは南西諸島の基幹作物ですが、農家戸数の減少、高齢化により手作業で行われていた刈り取りや植え付け作業の機械化への転換が行われています。しかし、主力品種として活躍してきた「NiF8(農林8号)」は機械収穫後の萌芽が少なく収量が低いことなどの問題がありました。2019年3月に品種登録した「はるのおうぎ」はさとうきび農家が抱える課題の解決に貢献できる期待の品種です。今後とも種子島研究拠点職員の総力をあげて、「はるのおうぎ」の普及を進めるとともに新たな品種育成を進めてまいります。

### ニューノーマル時代の 種子島研究拠点リーダー

種子島研究拠点は、平成31年/令和元年度から令和2年度にかけて4人の研究者のうち3人が入れ替り、さらに新人も加えた5人体制のニューノーマルでさとうきび研究を進めています。田村調整監も新メンバーの一人ですが、業務中は石垣時代からのトレードマーク?の白いキャップを常に被り、拠点運営に研究業務に日々奮闘されています。ゆったりしながらも粘りのある人柄で、新しい種子島研究拠点を牽引してくれることでしょう。なお、寒さが苦手なようで、種子島は大分寒いようです。

作物開発利用研究領域

さとうきび育種グループ長 高橋宙之